

ヒアリング調査結果 ～スキップ教室卒業生保護者～

- 実施日： (1) 令和元年7月8日(月)
(2) 令和元年7月10日(水)
(3) 令和元年7月11日(木)
- 実施場所： (1) イングビル3階 第3会議室
(2) 保谷庁舎2階 第1会議室
(3) 田無庁舎5階 501会議室
- 実施方法： スキップ教室卒業生保護者に、一人ずつインタビュー形式で実施
- 回答者： 3人(全員が母親)

お子さんは、スキップ教室に通学することを楽しみにしている様子だったか

- どちらかといえば楽しみにしていた。中学2年生で学校に行けなくなった。はじめは、親の思いで行かせたという感じだった。
- 最終的には、どちらかといえば楽しみにしていた。はじめは週2～3日・午前中だけだったが、最後は週5日通うことができた。スキップ教室に通うようになるまで数年かかっており、小学校高学年から不登校になって、中学に行きたい気持ちがあり通学したものの再び不登校となった。中学1年生の2学期から自分の意思でスキップ教室に通うようになった。最初はしんどかったと思うが、最後は意欲を持って臨んでいたと思う。
- 楽しみにしていた。学校に行けなくなったのは中学1年生の秋、原因は友だちとの関係づくりが上手くいかず学校に居場所がなくなったことであり、外には出たかったようである。スキップ教室には中学1年生の冬から通い始めて休むことなく楽しく通うことができていた。

スキップ教室の利用が、お子さんにとってよかったと思えること

- きょうだいはいたが、外で同世代とふれあうことができない。スキップ教室では同世代や小学生ともふれあうことができてよかったと思う。
- 家で一人で勉強することはできても、人に(先生に)教えてもらうということが大事だと思う。スキップ教室のおかげでそれができた。
- 子どもが、不登校で自分に自信がなくなっていたときに、スキップ教室で同じ境遇の子どもたちを見て、「みんな普通だった。」と話していた。そのような実感を持つことができたこと、自分を客観的に見ることができたことがよかったと思う。
- 人目を気にしていたが、居場所がある、仲間がいると思うことによって自信がついてきたことがよかったと思う。
- 学年を越えての交流があり、1学年上の子とも仲良くなり夏休みに遊んだりしていた。学校ではできないそのような交流があり、先輩は後輩の面倒をみるなどのよい関係が持てたと思う。
- 人との距離感を上手にとることが苦手な子どもで、相手の懐いきなり飛び込むようなところがあった。人数の少ない小学校から、多い中学校に進んだとき、他人との距離感がうまくつかめず不登校につながっていったように思うが、スキップ教室の先生は、まず人との距離を上手にとる手伝いから始めてくれた。そういった対応が楽しい気持ちにつながっていったのだと思う。

- スキップ教室の中で友だちの輪ができた。年上、年下の子どもとも友だちになって、今でもつきあいが続いている。本人にとって非常によかったと思う。
- 卓球大会、社会科見学、調理実習など行事が多数あることがよかった。

スキップ教室の利用が、保護者にとってよかったと思えること

- 子どもが外に出ること自体が、保護者の気持ちの上でもよいことだと思う。
- 二者、三者の面談がよかった。子ども（当時、中学2年生）は親に悩みなどをあまり話してくれなかったが、スキップ教室の先生は子どもの内面までよく理解してくれていた。親としては「次の学期からは学校に通えるかな」などと期待したものだが、「ここで無理強いするとよくない」と、冷静な判断をしてもらえた。
- 所属する場所があるということがよかった。
- スキップ教室に通い始めてから、学校の校外学習の準備には参加する気持ちになってくれた。本番には参加できなかったが、そういう気持ちになってくれただけで親としてはうれしかった。
- 子どもの気持ちが回復していくことが感じられ、中学校から先の進学に関して、親として前向きになれた。
- スキップ教室に通うことまで親子とも頭がいっぱいだったが、中学2年生の段階で進学先の話などしてくれた。保護者を集めての進路説明会が中学2年生の時からあったのはありがたかった。早い段階での働きかけがなければ、ぎりぎりまで中学卒業後のことに気持ちを向けることができなかったと思う。

スキップ教室で、他の保護者との交流の機会はあったか

- 他の保護者との交流は少ない。子どもから友だちの話は聞くがその保護者と話をする機会は少ない。進路説明会では顔を合わせるので挨拶はするが、話をする雰囲気ではない。人によって違うと思うが、もう少し話す機会がほしかった。

スキップ教室への今後の期待、改善してほしいところなど

- 不登校の子どもを持つ親は孤立してしまいがちである。周囲の保護者が自分のことを気にしつつも当時は声をかけづらかったと後になって聞いた。不登校の子どもを持つ親同士の集まりや交流の機会というものはほとんどない。集まりがあっても参加の意向は保護者によって異なるだろうが、機会や場の提供はあってもよいと思う。
- スキップ教室を見学できたのはよかった。また、見学するまでは暗い雰囲気を想像していたが、実際に見た印象は「明るいところ」と感じた。
- スキップ教室には感謝の気持ちしかない。施設が充実して、どんどん良くなってくれるといいと思う。
- 体育を行うときは、小学校の体育館を利用するが、学校の行事が優先され体育館などの設備が使えず、授業ができないことがあったので、使えるようになるといいと思う。あまりにきちんとした施設を整備すると、自由な雰囲気が損なわれ、不登校の子どもが通えなくなる可能性もあるので加減が難しいが、今の所で活動できているのであれば、それなりの場所が確保できればいいと思う。
- 入った当初は、子どもの教室での様子を聞きたかったし、伝えたいことも多かったが、なかなか先生と話をすることが持てず、それが不安だった。時間が経過するにつれて、スキップ教室での様子を子どもから聞くことができ、安心することができた。
- TV番組で学校内にスキップ教室のようなものを設置している事例をみたが、子どもは

「自分はいくには行けなかった」と言っていた。結局は苦手意識のある学校という場所に行くことになるのでダメなのだと思う。通っていたスキップ教室には制服がなく、自転車通学も自由で、そこも良かったのだと思う。不登校の子どもにとって通いやすい雰囲気や仕組みは続けてほしい。

スキップ教室以外での地域との交流、公的・私的に支援を受けた経験など

- 自分は近所付き合いのある方だと思う。地域の中では孤独感のようなものはなかったが、学校の同学年の保護者の中では孤立している感じもあった。
- 子どもたちが小さい頃から子育て関連のイベントには参加していた。子どもが不登校になってからは、同じ境遇の人と話をしたり、学ぶことがあればという思いがあり、不登校に関係する講座などに参加し、情報収集している。
- 地域活動に参加していたため、そこで地域とのつながりがあった。活動の中で、障害とまでは言えない状態の子どもとのつながりを持つことがあり、教育相談の存在はそこで初めて知った。
- 不登校になって、スキップ教室に通い始める前に一時的に市外の私立学校に通学していた。通常の授業のほか、高等部のゼミ授業を受講するもので、ゼミ授業では、うどん打ちなど様々なプログラムがあった。うどん打ちのプログラムでは、材料を調べる、買う、作る、食べる、売るといった体験ができた。
- 学習塾で少し早めの時間帯から講義を受けていたため、勉強の遅れはあまり感じなかった。

子育てへの支援について、他区市町村にある施設やサービスで西東京市でも取り入れたほうがよいと思うもの

- 保健室登校をしている子どもたちの（スキップ教室のような）居場所が、保健室、教室以外に学校の中にあるといいと思う。
- 他の自治体には、保健室登校やクラスに入れない子の居場所が、学校の中にあるとTV番組で見たことがある。一方で、学校そのものを苦手としている子どもには向かないと思う。
- 不登校の子どもが進路に関して情報が少ない。学校の進路説明会に行っても一般受験のことについてだけで、不登校の子どもが進路についての説明はなかった。スキップ教室では、そういう子ども向けの説明会を丁寧にやってくれたので情報を得られたが、スキップ教室にも通えない子どもは情報を得るところがないのではないかな。進学や就職などの進路の情報がまとまっているといいと思う。
- 学校は行きたくないけれど、そこには行ってもいいかなと思わせるようなところがあるといい。

不登校の子どもや保護者たちへのアプローチ方法・手段について有効なもの

- それぞれの子どもでケースが異なり、一概には言えない。親も疲れ切ってしまうと会合などに参加できなくなる。親子で誰にも相談できず孤立しているケースもあるのではないかな。
- 不登校についての相談先は、主にスクールカウンセラーだった。病院のカウンセラーにも相談したが、学校・クラスの状況・雰囲気や担任の先生などのことについて知らない人に話をしてもどこまで伝わるかわからないし、子どもは話せなくなる。親としては、学校とのつながりを保つためにもスクールカウンセラーに相談をしていた。

- 子どもが相談するスクールカウンセラーは、相談内容や相談のしやすさを考えて、男性か女性かを選べるといいと思う。
- 養護教諭には子どもの話をよく聞いてもらった。スキップ教室に行ってからでも小学校の養護教諭を訪ねて親には相談しないことも話していたようだった。親以外の第三者的なおとなと関わりを持てたことがよかった。
- 中学校の先生もよく面談してくれた。スキップ教室と学校の両方から支援された気がする。

地域や社会に望むこと

- 自分の子どもは、引っ込み思案で自分から発言する力が弱かったのだと思う。中学に入った時、喘息のため、体育祭の練習なども体調により休むことがあった。別の小学校から来た同級生はそういった事情もわからず、なぜ休むのかなどと言われたようである。コミュニケーション不足の問題だと思うが、おとなにも子どもにも「人はそれぞれ」といった意識が広まるとよいのではないかと思う。
- 不登校について、家庭内でも配偶者や祖父母など家族に理解されないことも多く、責められることもある。地域や周りの人にはなおさら理解してもらうことは難しいと思うが、まず知ってほしい。
- 不登校になるきっかけや子どもの状況は様々である。一般的な生活では不登校についての情報がない。学校でも不登校はネガティブなものとして受け止められている感じがする。
- 以前に比べ、クラスに1人や2人不登校の子どもがいる状態でも、気にしなくなってきた。構われすぎるとも苦しいが、無関心なのも問題と感じる。
- 子どもが不登校だった親の話を聞く機会がほしい。誰しものが不登校になる可能性はあるが、直面するまでは何をどうしていいのかわからない。不登校を乗り越えた経験者（保護者）のいろいろな体験談を聞く機会などあればよいと思う。
- 子どもの状況はそれぞれであり、支援を求めている人もいれば、干渉されたくない人もいる。人それぞれだが、話をする場があることで保護者が安心することもある。
- 発達障害などの子どもについてのTV番組を最近よく見る。当事者となる親は、今まで全く経験もない事態に直面するので、様々な事例などを見聞きできる機会が社会全体に増えることはよいことである。

西東京市に期待すること

- 学校で早期にスキップ教室のような施設の紹介があってもよいと思う。一般的な情報として「不登校の子どもにはこのような支援がある」という情報提供が入学時などにあるのもよいかと思う。
- スキップ教室を見学したが通学できない子どもの居場所となるような所があると良い。学校のようなフリースクールは増えているようだが、学校自体に苦手意識がある子どもが行けるかといえば難しい。
- 状況が安定してくるといろいろな話もできるようになるし、人の話を聞けるようになるが、今苦しんでいる当事者は、体験者の話を聞いても、将来への不安を感じてしまい受け入れられないことがある。
- 父親の不登校への理解が進んでおらず、「大丈夫だよ」と言ってほしいのに言ってもらえなかったり、子どもとの距離もできてしまい、家庭にも子どもの居場所がなくなってしまうこともあると思う。父親向けの講座や父親が家庭の話ができる場があるとよい。

- 仕事をしている保護者としては、土曜日にも相談窓口が開いているとありがたい。相談がある度に仕事を休まなければならない、職場での立場が悪くなってしまった。月1回でもいいので土・日曜日に相談窓口を開いてほしい。

現在、子どもが不登校である保護者の方へのメッセージ

- 中学2年生に不登校となった子どもは、スキップ教室に通学・卒業して、高校に進学し、現在は理系の大学に在学している。昔から自分の興味があることに対して集中するタイプだった。海外留学などの体験もして今は大学院を目指している。スキップ教室に通っているときに「不登校になったときは、車でいうとガソリンが切れたときです。今はガソリンをためている状態なので、親はつらいと思うけど、どうか待ってあげてください。」と話しをしてくださった先生がいた。「不登校」は出口のない状態ではないのだと今は実感している。現在、子どもの不登校で悩んでいる保護者はつらいと思うが、子どもはその間にエネルギーを蓄えており、必ず飛び立つときがくるのだと、お子さんを信じて待っていてほしい。

まとめ-----

- 子どもが最初に「学校に行きたくない」と言い出したときの、保護者のとまどいや混乱は大きい。一方で、後で考えれば思い当たる節があったという話も一樣にうかがえた。予兆を感じるくらいの時期では、相談先もよくわからず、具体的な行動もなかなか起こせないという実情が見受けられる。どの回答者も、スキップ教室の存在を知ったのは、事態に直面してからである。早い段階で相談先がわかることは重要と思われる。
- 保護者にとって、子どもがどこかに所属しているという安心感は大きい。また、子どもにとって、同じ状況にいる子どもとの交流、第三者的なおとなとの交流が救いにつながるとうかがえた。
- 子どもの不登校は、保護者にとって初めての経験の連続となり、先のことには考えが及びにくい状況に陥ってしまう。当事者（保護者）同士の交流の機会が少ないとの話もあったが、現在の当事者よりもそれを体験した先輩保護者の話を聞くことができればよいのではないかという意見があった。一方で、不安を抱えている状態では話を聞いても受け入れられないということもあり、受け止め方は個々によると思われる。
- 学校に行くのが普通・当たり前という社会通念の中で、保護者も子どもも苦悩していると思われる。地域や社会全体が多様性を認めること自体が、一つの支援になると感じられた。